

二〇二六年度

第一回 入学試験問題

国語（五十分）（全十六ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

問題は次のページからはじまります。

□一 — 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) 外が寒いのでマフラーをマいて出かけた。
- (2) カイソク電車に乗って目的地に向かう。
- (3) 商品をソウコにしまう。
- (4) ジョウキ機関車に乗って旅をする。
- (5) 彼のジユクレンの技に目をみはった。

□二 次の……線部が直接かかる言葉を、——線ア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- (1) 母が ア作ってくれた イ温かい ウ料理を 家族で エ食べた。
- (2) 友人と ア駅の前で イ話していたら ウ雨が エ降り出した。
- (3) ア朝の光が 窓から イさし込んで ウ部屋を エ明るくした。
- (4) ア科学技術の 進歩が イ人々の ウ暮らしを エ豊かにした。
- (5) ときどき 家に ア帰る イ途中にある ウ本屋に エ寄る。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

宮城県石渡市に住む海光小学校六年生「わたし」三船七海は、十年前の震災による津波で母を亡くした。ふとしたきっかけで、母が小学生のとき、学校と地域の伝統行事である「海光祭」を取りまとめていたこと、石渡が大好きで、新しいアイデアをたくさん出していたことなどを知る。「わたし」は、震災以降途切れてしまっていた「海光祭」を復活させることを提案し、学校の許可を得ることができた。実行委員長となった「わたし」は、担任の橘先生と一緒に、地域の人たちに協力をお願いをしている。そんなある日、地域の人からの苦情電話に橘先生が対応している姿を目撃する。

——クレーム電話だ。一瞬、身体が冷たくなる。海光祭のことで、だれかが文句をいつてきたんだ。さらに近づくと、だれかの怒鳴り声ははつきりと聞こえた。あまりの迫力に、耳をふさぎたくなる。信じられないほどひどい言葉に、背筋が凍る。申しわけございません、とつぶやく先生の背中を、わたしはぼうぜん見つめた。

ふと横を見ると、村田先生が立っていた。

「……こういう電話、よくかかってくるんですか？」

A わたしはたずねた。

「まあ、たまにかな」

先生は B いった。

「でも、大丈夫。海光祭に関する電話はすべて、橘先生が対応してるから」

すべて、橘先生が？

わたしは村田先生を見あげた。先生はこっちを見なかった。橘先生ひとりに電話をおしつけて、いったい、なにが『大丈夫』なの？ むかむかして、その場で電話が終わるまで待っていていようとすると、

「教室に行つてなさい」

村田先生はあっさりいった。

「まだかかりそうだし、来たことは伝えておくから」

くそ、と思つたけれど、わたしは村田先生に一礼して、職員室を出た。

夕方のだれもない教室は、ぞっとするほど薄暗かった。

最近、陽が落ちるスピードがずいぶん速くなった。電気をつけて窓際に立ち、わたしは淡い金色と薄い紫がからみあう空を見つめた。

まだ胸がどきどきする。男の人の怒鳴り声が耳から離れない。心を殴りつけるような声だった。申しわけございません、と繰り返す先生の声と、いつか、地域の人たちに頭をさげていた先生の姿が、頭のなかを何度も回った。

今まで、どれくらいあんな電話がかかってきたんだろう。

わたしの知らないところで、先生はどれほど頭をさげてきたんだろう。

海光祭を復活したいなんていわなきや、先生は①あんな苦勞をしなく

ですんだ。先生につらい思いをさせているのは、わたしだ。

うつすら赤味あかみが差さした金色の光の上に、ゆつくりと青い絵の具を重ねるように、空全体が藍色あいいろへと変わる。外の冷えた空気ひが、窓ガラスを越えてたちこめてくる。十分待っても、三十分が過ぎても、先生は教室に
来なかった。

まだ電話中なんだろうか。

電話でずっと、あやまりっぱなしなんだろうか。

地域を回っているときは、あんなにひどく怒鳴どなられることはなかった。バカにされることはあっても、心を傷きずつけられたりはしなかった。村田先生のこと、わたしは責められない。意見だけとおしてもらって、大変なことは全部、先生におしつけていた。

さらに十分がたち、外はすっかり夜の色だ。

先生、はやく来てよ。

窓に映るわたしは、今にも泣きそうな、すごく情けない顔なまをしていた。

もういいよ。あんな電話の対応なんて、しなくていい。海光祭、わたし、やめてもいいから……。

「ごめーんっ」

次の瞬間しゅんかん、勢いきいよくドアが開いた。赤ジャージ姿の橘先生が教室に飛びこんできた。

「三船さん、お待たせつ。もー、思った以上に長引いちやつて。だいぶ待たせちゃったね」

ハンカチで汗あせをふきながら、明るい声でいった。

「先生……」

②わたしは先生の顔をまともに見られなかった。

「わたし、知らなくて。あんな電話たくさん来るなら、わたし、海光祭……」

「ストロップ」

先生が大きな声を出した。

「三船さん、大丈夫だから。わたしはぜんっぜん、つらくないから」

「でも」

マスクを少しずらして、てのひらで顔に風を送りつつ、先生は白い歯を見せた。

「あのね、新卒しんそくでこの学校に来たとき、わたし、真っ先に提案したの。

先生たちに、海光祭、復活しませんかって」

③え？

先生ははずかしそうに笑った。

「でも、だめだった。まあ、新人の先生なんてただでさえ発言力がないのに、わたしのやり方もまずかったからね。気持ちだけ先走っちゃって、橘先生は学校行事より、もっと授業に力を入れたらどうですかー、なんていわれちゃつて。くやしかったな」

はーっ、と先生は大きく息をついた。

「だから、最初あなたたちから話を聞いたとき、絶対無理だと思った。

あのときだめだったのに、今年うまくいくわけないって。海光祭は来年以降、コロナが終わって落ちついたら、また提案すればいいかなって。

④「ごめんね」

先生は息を吸いこんだ。

「あなたたちに、来年はないのにな」

胸の奥がかすかにうずいた。

「なにかをはじめたり、変えようとするとき、必ずなにかをいう人がいる。真剣になるほど、その姿を笑う人がいる。⑤絶対に傷つかないところから、石をぶつけてくる人がいる。とくにいまみたいな状況だと、大人でも正解がわからないから、あなたたちだけじゃどうにもならないことがある」

先生は強い口調でいった。

「だから三船さん。そのためにわたしたちがいるの。先生がいるの。忘れないで」

その言葉は、わたしにまっすぐに届いた。

うれしかった。

心の底から海光祭を復活させようとしている先生の想いが、痛いくらい伝わってきた。

だからこそ、いいのかな、と思った。

橘七海*2さんのこと。

わたしがあの記事を読んだことを、先生は知らない。わたしは先生に

かくしごとをしたくなかった。でも、知らないふりをすると、すべてを伝えることのどつちが正解なのか、わからない。

もし自分が先生だったら、どうしてほしいだろう。

わからない。

⑥本当にわからなかった。

「——先生」

⑦迷って、迷って、わたしは口を開いた。

もしかすると、全部話して楽になりたかっただけかもしれない。でも、ひとつひとつ言葉を選んで伝えているあいだ、楽になるどころか、胸が痛くて仕方なかった。

橘七海さんの名前を聞いたとき、先生はかすかに目を見ひらいた。でも、そのあとは窓に映る夜の色を見つめて、じっと耳を傾けていた。最後に小さな声で、わたしはきいた。

「先生の妹さんの名前も、七海、なんですか？」

先生はだまっただままだった。

やっぱり、きかないほうがよかったかな。わたしが後悔しかけたとき、先生は静かにうなずいた。

「たったひとりで、いろいろ調べて」

⑧少しかすれた、張りつめた声だった。

「そんなむかしの記事まで、自分で見つけて」

気を悪くしたんだろうか。ほんの少し、こわくなる。

「七海って名前の子が、こんなに一生懸命、目の前でがんばってる。大人のわたしができなかったことを、友だちと力をあわせて、やりとげようとしてる」

窓ガラスのなかで、目があった。砂がくずれるみたいに、先生は笑った。

「そんなの、力がわかないわけじゃないでしょ」

先生はわたしの前でてのひらを広げた。はいっ、というので、おそろおそろタッチすると、ペしっ、と湿った音がした。

「もういつかいつ」

先生がさげんだ。振りかぶって手を打ちあわせると、今度は、クラックカーが炸裂したみたいで、いい音がした。

「まだまだ、これからっ」

わたしはうなずいた。てのひらがじんじん痛かった。痛くて、気持ちよかった。その痛みを強くにぎりしめて、誓った。

コロナがなんだ。

海光祭、わたしは絶対、あきらめない。

(蒼沼洋人『波あとが白く輝いている』より)

*1 新卒……ここでは「大学を卒業したばかり」の意。

*2 橘七海さんのこと……「わたし」は、図書館で震災について調べてい

たとき、震災で亡くなった十二歳の妹「橘七海」さんへあてたメッ

セージが書かれた記事を見つける。メッセージを書いた人は、担任の橘先生と同名同姓の「橘千早」という名前だった。「橘七海」さんは、震災のとき小学六年生、海光祭が途絶えた年の卒業生にあたる。

問一 A・ B に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中

から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しぶしぶ イ 淡々と

ウ おそろおそろ エ しどろもどろ

問二 ——線①「あんな苦労」とありますが、どのような苦労ですか。

三十五字程度で答えなさい。

問三 ——線②「わたしは先生の顔をまともに見られなかった」とあり

ますが、それはなぜですか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生を困らせていることに気づき、後ろめたさを感じていたから。

イ 無理に明るくふるまっている先生の姿が、切なく思われたから。

ウ 協力的ではない村田先生への怒りを、必死におさえていたから。

エ 夕暮れの教室で、ひとりにされたことに不満を感じていたから。

問四 ——線③「え?」とありますが、ここから「わたし」のどのような

な様子が読み取れますか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海光祭の準備が「わたし」の思った以上に進んでいたことを聞き、喜んでいる。

イ 自分の謝罪を拒んでまで意志を通そうとする先生に、不信感をつのらせている。

ウ 橘先生も最初は「わたし」たちの提案に反対していたことがわかり、戸惑っている。

エ 先生が以前海光祭の復活を自分から提案していたことを知り、驚いている。

問五 ——線④「ごめんね」とありますが、橘先生が謝ったのはなぜ

ですか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分がどんなに頑張っても成功させられなかった海光祭を、子どもたちだけで成功させるのは無理だと決めつけていたから。

イ 先生と違って、小学六年生にとっては今年が海光祭再開の最後の機会となることに、これまで気づかずにはいたから。

ウ 来年コロナが落ち着くとは言い切れないのに、子どもたちに期待させるような言い方をしてしていたことに気づいたから。

エ 自分の夢を子どもたちに託し、実行させることが正しいことなのかどうか、今でもわからず迷っているから。

かどうか、今でもわからず迷っているから。

問六 ——線⑤「絶対に人がある」とありますが、このような表現を通して、橘先生は「わたし」にどのようなことを伝えようとしていますか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 道理に合わない非難や批判があっても恐れず、必要なときは大人を頼って、信じたことをやりとげてほしいということ。

イ 自分たちが置かれている状況の危険性を深く考え、安全のために大人と共に行動していくことが大切だということ。

ウ 生き方には正解がないので、色々な立場から物事を見て、自分らしきとは何かということを考え続けてほしいということ。

エ どのような状況にあっても、卑怯な大人とは関わらず、子どもらしきを持ち続けて生きてほしいということ。

問七 ——線⑥「本当にわからなかった」とありますが、何が「本当にわからなかった」のですか。四十字以内で答えなさい。

問八 ——線⑦「迷って、迷って、わたしは口を開いた」とありますが、この決断をしたのはなぜだと考えられますか。先生の言葉を参考に、四十字以内で答えなさい。

問九 — 線⑧「少しかすれた、張りつめた声だった」とありますが、橘先生の声がこのようになったのはなぜですか。適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 過去の失敗を遠回しに非難され、悔しさがこみ上げてきたから。
イ さきほどの電話対応を思い出し、心が折れそうになっていたから。
ウ 妹に関する辛い過去を思い出し、感情をおさえて話していたから。
エ 記事のことを今まで隠していたことを知り、気を悪くしたから。

問十 次の会話は、本文について二人の中学生が話している場面です。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

純子 「わたし」が先生とのやりとりを通して成長していく様子がとてもよく伝わってくる話だったね。

心香 そうだね。「わたし」が先生を待っている間、外の景色を眺めている時間は、自分の行動が多くの人に支えられていることに気づく時間でもあったんだろうね。

純子 その時間の中で、自分を客観的に見ている場面があったね。
心香 1 という一文だね。

純子 この時、「わたし」は海光祭をやめてもいい、と考えているね。

心香 先生は、「わたし」の言葉を「2」とさえぎって、最後まで

で言わせなかったけれどね。

純子 妹の橘七海さんの名前が、「わたし」三船七海の口から出たときは、橘先生もさぞ驚いただろうね。

心香 先生は、たぶん途中までは「わたし」を見ながら話を聞いていたけれど、妹の名前が出てからは、「わたし」から目をそらして、妹のことを思い出していたんじゃないかな。

純子 なぜそう思うの？

心香 3 という一文があったよ。

純子 確かに、妹の名前が出た後、先生は「わたし」から目をそらしているね。そして、そのまま「わたし」と先生は窓ガラスを通して目が合ったんだ。

心香 先生は心の底から「わたし」たちを支えようとしていて、「わたし」も友だちと協力して海光祭を復活させようとしていた。そのお互いの気持ち^{たが}を隠さず語り合えたことで、海光祭復活への想いが高まった気がするな。

純子 ラストで二人がタッチしあう場面では、回数を重ねるたびに、「わたし」の迷いがふつきれていくような気がしたよ。

心香 てのひらの「痛み」は、先生の妹への想いとか、「わたし」の母への想いとか、そういった誰かの「想い」を引き受けたものなのかもね。

純子 「わたし」は、「痛みを強くにぎりしめて」何を「誓った」のか

しゅ。

心香 4 ということじゃないかな。海光祭は開催かいさいできたのか、続
きが気になるなあ。

(1) 1 に入る一文を探し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答え
なさい。

(2) 2 に入る言葉を五字程度で探し、抜き出しなさい。

(3) 3 に入る一文を探し、はじめと終わりの五字をそれぞれ答え
なさい。

(4) 4 に入る言葉を考えて、二十字程度で答えなさい。

四 次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

雑草を育てることは難しい？

皆さんは、雑草を育てたことがありますか？

雑草なら庭にいくらでも生えている……と思うかもしれませんが、そうではありません。実際に、種を播いて、水をやって、育てるのです。雑草は勝手に生えてくるものであって、雑草を育てるなんておかしいですよ。

私は雑草の研究をしています。そのため、研究材料として雑草を育てることがあります。

雑草は放っておけば育つから、雑草を育てるのは簡単だ、と思うかもしれませんが、ところが、それは大間違いです。①雑草を育てるのは、じつはなかなか難しいのです。

雑草を育てることが難しい理由は、私たちの思うようにいかないからです。

何しろ、種を播いても芽が出てきません。

野菜や花の種であれば、種を播いて水をやり、何日か待っていれば芽が出てきます。ところが、雑草は違います。種を播いて水をやっても、いくら待っても芽が出てこないことがあるのです。

野菜や花の種は、人間が発芽に適していると考えた時期をあらかじめ

想定して、改良されています。そのため、野菜や花の種は人間のいうとおりには芽が出るのです。一方、雑草は芽を出す時期は自分で決めます。人間のいうとおりには、ならないのです。

また、野菜や花の種であれば、一斉に芽を出してきます。ところが、雑草は芽が出たとしても時期がバラバラです。早く芽を出すものがあるかと思えば、遅れて芽を出すものもいます。忘れた頃に芽を出してくるものもあれば、それでも芽を出さずに眠り続けているものもあります。やっと芽を出しても、足並みが揃っていません。

早く芽を出すせつちかちもいれば、なかなか芽を出さないのんびり屋もいます。このバラバラな性格は、人間の世界では「個性」と呼ばれるのかもしれませんが。

雑草はとても「個性」が豊かです。そういえば、聞こえはいいですが、結局バラバラで扱いにくい存在です。そして、個性ある雑草たちは育てにくい存在でもあるのです。

それにしても、どうして、雑草は芽を出す時期がバラバラなのでしょうか。

植物にとっては、早く芽を出したほうが成長するためには有利な気もするのにな、どうして雑草には、ゆっくりと芽を出すような性格のものがあるのでしょうか？

遅く出る芽に価値はあるのか？

皆さんは、「②オナモミ」という雑草を知っていますか。

トゲトゲした実が服にくっつくので「くっつき虫」という別名もあります。子どもの頃に、実を投げ合って遊んだ人もいるかもしれません。オナモミの実は知っていても、この実の中を見たことのある人は少ないのではないのでしょうか。

オナモミの実の中には、やや長い種子とやや短い種子の二つの種子が入っています。

二つの種子のうち、長い種子はすぐに芽を出すせつかち屋さんです。一方の短い種子は、なかなか芽を出さないのんびり屋さんです。

オナモミの実は、性格の異なる二つの種子を持っているのです。

それでは、このせつかち屋の種子とのんびり屋の種子は、どちらがより優れているのでしょうか。

そんなこと、わかりません。

早く芽を出したほうが良いのか、遅く芽を出したほうが良いのかは、場合によって変わります。

A「A」というとおり、早く芽を出したほうが良い場合もあります。

しかし、すぐに芽を出しても、そのときの環境がオナモミの生育に適しているとは限りません。「急いで事はし損じる」というとおり、遅く芽を出したほうが良い場合もあります。だから、オナモミは性格の異なる二つの種子を用意しているのです。

雑草の種子の中に早く芽を出すものがあつたり、なかなか芽を出さないものがあつたりするのも、同じ理由です。

早いほうがよいのか、遅いほうがよいのか、比べることに何の意味もありません。オナモミにとっては、どちらもあることが大切なのです。

芽を出すことが早かつたり遅かつたりすることは、雑草によっては、優劣ではありません。雑草にとって、それは個性なのです。

しかし、早く芽を出すものがあつたり、遅く芽を出すものがあつたりすると、いろいろと不都合もありそうです。芽を出す時期は揃っているほうが良いような気がします。

バラバラな個性って本当に必要なのでしょうか？

自然界は個性にあふれている

バラバラな性質のことを「遺伝的多様性」といいます。

個性とは「遺伝的多様性」のことです。多様性とは「バラバラ」なことです。

X「X」、どうしてバラバラであることが良いのでしょうか。

皆さんは、学校で答えのある問題を解いています。問題には正解があり、それ以外は間違いです。

ところが自然界には、答えのないことのほうが多いのです。

Y、先に紹介したオナモミに代表されるように、雑草にとっては、早く芽を出したほうがいいのか、遅く芽を出したほうがいいのか、答えはありません。

早いほうがいいときがあるかもしれませんが、じっくりと芽を出したほうがいいのかもありません。環境が変われば、どちらが良いかは変わります。どちらが良いという答えがないのですから、「どちらもある」というのが、雑草にとっては正しい答えになります。

Z、雑草はバラバラでありたがるのです。どちらが、優れているとか、どちらが劣っているという優劣はありません。むしろ、バラバラであることが強みです。

そして、すべての生物は「遺伝的多様性」を持っているのです。

じつは人間の世界も、答えがあるようで、ないことのほうが多いのです。

本当は何が正しくて、何が優れているかなんてわからないのです。「もっと早くやりなさい」とスピードを評価してみたかと思うと、「もっといいねいにやりなさい」とゆっくりやることを褒めだしたりします。

人間の大人たちは答えを知っているようなフリをしています。そして、優劣をつけてわかったようなフリをして、「これは良い」とか、「それは

ダメだ」と言っています。

しかし、何が優れているかなんて、本当は知りません。いや、本当は、どれが優れているということはないのです。

③それを知っているからオナモミは、二つの種子を持っているのです。

タンポポの花の色に個性がない理由

しかし、④不思議なことがあります。

先に書いたように、自然界では多様性が大切にされます。それなのに、タンポポの花はどれもほとんど黄色です。

紫色や赤い色をしたタンポポを見かけることはありません。タンポポの花の色に個性はありません。これはどうしてなのでしょう。

タンポポは、主にアブの仲間を呼び寄せて花粉を運んでもらいます。アブの仲間は黄色い花にしやすい性質があります。そのため、タンポポの花の色は黄色がベストなのです。

黄色が一番いいと決まっているから、タンポポはどれも黄色なのです。しかし、タンポポの株の大きさはバラバラです。大きなタンポポもあれば、小さなタンポポもあります。葉っぱの形もさまざまです。ギザギザに深く切れ込んだ葉っぱのものもあれば、切れ込みのない葉っぱのものもあります。

どんな大きさが良いかは環境によって変わります。葉っぱの形も、ど

れが良いという正解はありません。

そのため、タンポポの大きさや葉っぱの形は個性的なのです。

個性は当たり前のようにあるわけではありません。個性は生物が生き残るために作り出した戦略せんりやくです。個性があるということ、つまりはなぜバラバラであるかといえば、そこに意味があるからなのです。

必要だから個性はある

人間はどうでしょうか。

目の数はどうですか？

目の数は誰もが二つです。これは人間にとって目の数は二つがベストだからです。同じように鼻の数にも、鼻の穴の数にも個性はありません。おそらく人間にとって鼻は一つ、鼻の穴は二つが一番良いのです。

目の数や鼻の数には個性はありません。

動物の目の数が二つなのは当たり前ではないかと思うかもしれませんが、そうではありません。たとえば、多くの昆虫は二つの複眼の他に、三つの単眼という目があります。つまり、目が五つあるのです。

はるか昔の古生代の海には、目が五つの生き物や、一つ目の生き物も存在していました。しかし今、私たち人間の目の数は二つです。それは、

目の数は二つがもっとも合理的で「目の数に個性はいらない」というの

が進化の結論だったからなのです。

しかし、私たちの顔はみんな違いちがます。誰一人として同じ顔はありません。垂れ目たの人もいます。つり目の人もいます。目の大きな人もいます。目の小さな人もいます。もし、人間にとってベストな顔があるのであれば、誰もがその顔をしているはずです。

いろいろな顔があるということは、どの顔が良いとか悪いとかではなく、いろいろな顔があることに価値があるのです。

性格も一人ひとり違います。得意なことも人それぞれ違います。

生物は必要のない個性を持ちません。私たちの性格や特徴に個性があるということは、その個性が人間にとって必要だからです。

ちなみに、自然界では花の色にバリエーションはありません。タンポポは黄色ですし、スマレは紫色です。昆虫を呼び寄せて花粉を運んでもらう野生の植物では、パートナーとなる昆虫を呼び寄せるためのベストな色があるのです。

ところが、花屋さんで売られている花や、花壇かだんの花は、同じ種類でも色とりどりでです。

それは、人間が花を楽しむために品種改良をしているからです。同じ色の花ばかりよりも、さまざまな色の花があったほうが、きれいです。そのため、人間はさまざまな色の品種を作り出しました。本当は人間も、「いろいろあること」の素晴らしすばさを知っているのです。

(稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』より)

問一 — 線①「雑草を育てるのは、じつはなかなか難しいのです」と
筆者が言うのはなぜですか。適切なものを、次のア～エの中から一
つ選び、記号で答えなさい。

ア 雑草は病気になるやすく、薬もなかなかきかないから。

イ 雑草は種が少なく、すぐに絶えてしまうから。

ウ 雑草は野菜や花よりも大きくなりすぎてしまうから。

エ 雑草は芽が出る時期がそろわず、人の思いどおりに育たないから。

問二 — 線②「オナモミ」の種子について、本文の内容とあっている

ものを、次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 長い種子は早く芽を出す性質がある。

イ 短い種子はなかなか芽を出さない性質がある。

ウ オナモミは、早く芽を出す種子だけを残してきた。

エ 国や地域によって、すぐれているとされる種子が異なる。

オ オナモミの種子は、環境に適した変化を今後も続けていく。

問三 — A に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 急がば回れ イ 石橋をたたいて渡る

ウ 善は急げ エ 石の上にも三年

問四 — X・Y・Z に入る言葉として適切なものを、次のア
～カの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ なぜなら

エ あるいは オ もし カ たとえば

問五 — 線③「それを知っているからオナモミは、二つの種子を持っ
ているのです」とありますが、「それ」が指す内容を、「環境」とい
う語を使って、三十字以内でまとめなさい。

問六 — 線④「不思議なこと」とありますが、それはどのようなこと
ですか。解答欄に合うように、三十字以内で答えなさい。
タンポポは、【三十字以内】ということ。

問七 本文の論の展開の特徴として適切なものを、次のア～エの中か
ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者の体験をもとに、自然界の多様性は人間とは無関係であると
を強調している。

イ 雑草の育て方を具体的に説明したあとに、人間の生活に役立つ例
を紹介している。

ウ 雑草と野菜の育ち方を比較しながら、雑草が役に立たない理由を
説明している。

エ 雑草の生態を説明したあとに、人間社会にもつながる点に着目し、話を広げている。

問八 ——線「早く芽を出すものがあるかと思えば、遅れて芽を出すものもあります」とありますが、雑草の芽に「早く出るもの」や「遅く出るもの」があることには、どのような意味があると筆者は考えていますか。「環境」という語を使って、解答欄に合うように、四十字程度で答えなさい。

【 四十字程度 】という意味がある。

問九 筆者は、人間の性格や顔がそれぞれ違うことをどのようにとらえ、どのような考えを述べていますか。解答欄に合うように、三十字以内で答えなさい。

性格や顔の違いを【 三十字以内 】と考えている。